

『資本論』第3部草稿における「歴史的考察」の再検討 ——新旧「移行論争」を題材にして

隅田聡一郎 | 一橋大学・院

はじめに

本稿では、『資本論』第3部草稿(MEGA 第II部門第4巻第2分冊)における「歴史的考察」(現行版第20章・第36章・第47章に該当)を中心に、マルクスの理論的アプローチにそくして新旧「移行論争」の主要テーマを再検討する。知られるように、1950年代初頭にマルクス主義経済学および歴史学において、「封建制から資本主義への移行」(以下、「移行」)をめぐる国際的な論争がまきおこった。モーリス・ドップの『資本主義発展の研究』(Dobb[1946])に対するポール・スウィージーの批判に始まった「移行論争」は、大塚史学の代表者である高橋幸八郎もその当事者となったため、日本においても大きく注目された。まずもって「移行論争」の主題は、「移行」における「商人資本」の役割であったが、大別すると、封建的生産様式あるいは封建的土地所有の「内部矛盾」を強調するドップに対して、スウィージーはそれらの「外的力」としての商業・都市・市場を強調した(Hilton et al.[1976]: p. 26)。日本においては、前者を大塚＝高橋が封建的生産様式内部における「農民層分解」として評価したのに対し、後者を世界史的な発展段階規定として擁護したのが宇野弘蔵であった(宇野[1966]: 105頁)。ただし、以下で論ずるように、「商人資本」の封建的生産様式に対する解体作用とその限界については、マルクスの経済学批判における「理論的展開」と「歴史的考察」との関係がふまえて、『資本論』関連草稿から慎重に解釈していく必要がある(第I節)。そのことによって、旧「移行論争」においては看過されていたものの、マルクス自身の移行理論においては極めて重要であった、資本主義的生産の生成における高利資本の役割を明らかにする(第II節)。

他方、50年代の「移行論争」と比較すると、70年代初頭に再燃した「移行論争」は、日本においてあまり注目されることがなかった。旧「移行論争」が西欧とりわけ

イングランドにおける「移行」を主題としたのに対して、当時の「南北問題」を背景とした新「移行論争」は、直接の発端となったラテンアメリカの資本主義発展(いわゆる「低開発」)をめぐる「フランク＝ラク라우論争」に見られるように、植民地あるいは「第三世界」における「移行」を問題化した(松原[1982]: 191頁)。図式的には、世界的な市場＝商品交換の発展を重視し、すでに16世紀以降にラテンアメリカ資本主義の成立を説くフランクに対して、ラク라우は資本主義概念を生産関係に限定し、当時のラテンアメリカにおける封建的生産様式の残存を強調したのである(Frank[1978], Laclau[1971])。

ただし、より厳密に「移行」を主題とする新「移行論争」は、ロバート・ブレナーが1976年以降に発表した諸論文をめぐって展開された。いわゆる「ブレナー論争」である。「政治的マルクス主義」の代表者でもあるブレナーは、伝統的マルクス主義とは異なる意味で「階級構造」の規定的役割を強調する、独自の「社会的所有関係」概念を提唱した^{❖1)}。そして、スウィージーやフランクのみならず、ウォーラーステインの「世界システム論」を、スミスやピレンヌと同様の「商業化モデル」と批判し、さらにアナル学派や歴史人口学に見られる主流派(E・ル・ロワ・ラデュリやM・M・ボスタン)の移行理論を「人口動態モデル」として退けたのである(Brenner[1985a]: p. 12)。ただし本稿では、旧「移行論争」と比べても、はるかに多くの実証的研究をともなって展開された「ブレナー論争」の諸論点を逐一検討することはできない^{❖2)}。本稿の課題は、ブレナーの「商業化モデル」批判を批判的に検証しつつ、その理論的核心にある「資本主義の農村的起源」すなわち「農業資本主義」論をマルクス自身の移行理論にもとづいて検討することである(第III節)。さらには、マルクスの理論的アプローチ(商品や貨幣といった経済的形態規定、生産過程における「資本のもとへの形態のおよび実質的包摂」など)を考慮することによって、いわゆる「商業化モデル」と「政治的マルクス主義」の移行理論をトータルに把握できることを示したい(第IV節)。

『資本論』第3部草稿における 「歴史的考察」の意義

1 経済学批判における「理論的展開」と「歴史的考察」の差異

周知のように、マルクスは『資本論』第1部を締め括る最終篇(すなわち仏語版で第8篇)「本源的蓄積」において、それ以前の篇における資本主義的生産そのものを対象とする「理論的展開」とは区別された、資本主義的生産の「歴史的生成」すなわち「成立条件」を考察した。重要なことは、その「歴史的考察」が、資本主義的生産様式内部における資本の概念把握とは全く区別されるという点である。例えば、資本主義社会における利子生み資本は、資本概念がもっとも発展した現象形態であるが、歴史的には「資本の大洪水以前の形態」である高利資本として存在している。マルクスは、『資本論』第1部第4章「貨幣の資本への転化」においても、資本の分析を始めるにあたって、次のように資本の生成史をひとまず度外視することをはっきりと断っている。

「歴史的には、資本は、どこでも最初はまず貨幣の形態で、貨幣財産すなわち商人資本および高利資本として、土地所有に相對する。とはいえ、貨幣を資本の最初の現象形態として認識するためには、資本の成立史を回顧する必要はない。同じ歴史が、日々、われわれの目の前で繰り返されている。」(MEGA II/6, S. 165)

大谷禎之介が指摘しているように、マルクスは、『経済学批判要綱』や「経済学批判。原初稿」において、「資本を概念的に把握したのちに、資本の生成に「先行した歴史的発展」を考察することの意味についてあちこち立ち入って述べて」いる^{❖3)}(大谷[2016]: 384頁)。『資本論』第3部草稿を解釈するうえで、資本を概念把握する「理論的展開」と資本生成に先行する「歴史的考察」との関係を方法論的におさえておくことは決定的に重要である。マルクスは、「理論的展開」すなわち資本の分析として「ブルジョワ経済の諸法則を展開する」際に、資本の成立史をひとまず度外視する。それは、「われわれの目の前で」日常的に貨幣が資本へと転化せざるをえない必然性を明らかにするためだ。ただし、こうした「理論的展開」だけで経済学批判が完結するわけではないことにマルクスは注意を促している。

「資本の存在は、社会の経済的姿態形成の長期にわたる歴史的過程の結果である。弁証法的形態で叙述することは、自己の諸限界をわきまえている場

合のみ正しいのだということが、この地点ではっきりと分かる。われわれにとっては資本の一般的概念がもたらされるのは単純流通の考察からである。なぜなら、ブルジョワ的生産様式の内部では、単純流通そのものが、資本の前提であるとともに資本を前提しているものとして以外には、存在しないからである。資本が単純流通から生じると言ったからといっても、資本がある永遠の理念の化体になるわけではない。」(MEGA II/2, S. 91)

このように、資本概念を考察する「弁証法的形態での叙述」すなわち「理論的展開」は、それ自体限界をはらんでおり、その「諸限界」の外には資本の生成過程に関する歴史的叙述が控えている。「理論的展開」においては、資本主義的生産様式という「資本によって支配されている生産様式の現実のシステム」が考察対象となる一方で、「歴史的考察」においては、そうした「資本の同時代史」ではなく、まさに「資本の生成、成立の諸条件および諸前提」すなわち「資本生成の歴史的先行段階」が主題となる(MEGA II/1.2, S. 368)。それゆえ、マルクスの経済学批判においては、まずもって資本概念が理論的に展開された後に、ひとまず度外視されていた「歴史的考察」が「理論的展開」の限界を補足しなければならない。それは、ブルジョワ経済学者たちのように、資本を「永遠に変わらない、自然にかなった」生産形態と見なし、「資本の生成のための諸条件」を「資本の現実の実現のための諸条件」と混同しないためのものである(ebenda, S. 369)。このように資本主義的生産様式の歴史的特殊性を把握することによって、資本主義的生産様式それ自体も、過渡的な生産様式すなわち「新たな社会状態のための歴史的諸前提」として現れてくるのだ(ebenda)。

2 経済学批判の不可欠な構成要素としての「歴史的考察」

さらにマルクスは、「理論的展開」と区別された「歴史的考察」の意味について、より立ち入って次のように述べている。

「われわれの方法は、歴史的考察がはいってこなければならない諸地点を、言い換えれば、生産過程のたんに歴史的な姿態にすぎないブルジョワ経済が自己を越えてそれ以前の歴史的な生産諸様式を指し示すにいたる諸地点を、示している。だから、ブルジョワ経済の諸法則を展開するためには、生産諸関係の現実の歴史を記述する必要はない。とはいえ、この生産諸関係を、それ自体歴史的に生成した諸関係として正しく観察し演繹するならば、それはつねに、こ

のシステムの背後にある過去を指し示すような、最初の諸方程式……に到達するのである。とすれば、これらの示唆は、現在あるものを正しく把握することとあいまって、過去の理解——これは一つの独立した仕事であって、これにもいずれは取り組みたいものだが——への鍵をも提供してくれる。」(ebenda)

マルクスの方法にとって、歴史学の実証的研究や「生産諸関係の現実の歴史を記述すること」は主題とはならない。あくまでも経済学批判における「歴史的考察」の課題は、「理論的展開」として「ブルジョワ経済の諸法則」を展開するために資本生成の諸条件を把握することなのだ。それゆえ、現在のブルジョワ社会の理解が過去の社会諸形態の理解にあたっての前提となるのであって、過去の社会諸形態の理解それ自体は、経済学批判における「歴史的考察」とは区別される「一つの独立した仕事」なのである^{❖4)}。その意味において、マルクスの「歴史的考察」は、経済史などの実証的研究とは一線を画するものである。

さらに重要なことに、「歴史的考察」は「理論的展開」の単なる補足にとどまらず、むしろ資本主義システムの歴史的位置および意義が最終的に明らかになるという意味で、同時に「近代ブルジョワ社会」という対象の考察を締め括るものでもあった(大谷[2016]: 392頁)。したがって、「歴史的考察」は、単に「理論的展開」と区別されるだけではなく、「理論的展開」による資本主義システムの考察を締め括るという意味において、経済学批判の不可欠な構成部分をなしているのだ。

このような意味での両者の関係は、『資本論』第3部においては、現行版第4篇のうち第16～19章と第20章「商人資本に関する歴史的なこと」との関係、同じく第5篇のうち第29～35章と第36章「資本主義以前」との関係、そして第6篇のうち第37～46章と第47章「資本主義的地代の生成」との関係に対応する^{❖5)}。要するに、マルクスは、まずもって「商業資本」「利子生み資本」「近代的土地所有あるいは資本主義的地代」を資本に包摂された形態において資本の諸形態として展開したのちに、この「理論的展開」を締め括る「歴史的考察」として、各篇の末尾において、歴史的に生成しつつある生産的資本が、眼前の「商人資本」「高利資本」「前近代的土地所有あるいは地代」をどのように包摂し、それらを従属させるにいたったかを叙述したのである(大谷[2016]: 383頁)。次節以降では、こうした「理論的展開」と「歴史的考察」との関係をつまみつつ、「移行論争」の主題を題材として、『資本論』第3部草稿の「歴史的考察」を検討していきたい。

II

商人資本および高利資本と 生産様式の「移行」

1 「商人資本に関する歴史的なこと」(現行版第3部第20章) における「歴史的考察」

マルクスは、『資本論』第1部「本源的蓄積」章において、「資本主義的経済秩序は、封建的経済秩序という母胎から生まれてきた。後者の解体が前者の構成諸要素を解放した」(MEGA II/7, S. 633)という「移行」に関する有名な記述を残している。「ドップ=スウィージー論争」は、この「移行」における「商人資本」の役割をめぐって展開され、最終的には、封建的生産様式における「内部矛盾」と商業・市場による「外的力」との「相互作用」が存在するという点で、両者の一致が見られた(Hilton et al.[1976]: p. 104)。しかし、「理論的展開」と「歴史的考察」の関係というマルクスの方法をふまえて諸草稿を入念に検討するならば、単に両者の「相互作用」としてのみ「移行」を理論化することはできない。

「移行論争」において、スウィージーは、かの「ピレンヌ・テーゼ」に依拠しつつ、「移行」の支配的要素として15・16世紀の西欧における「前資本主義的商品生産」を強調した(Hilton et al.[1976]: p. 49)。その根拠として、『資本論』第1部第4章冒頭の「商品生産と、発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的な前提をなしている。世界貿易と世界市場とは、16世紀に資本の近代的生活史を開く」(MEGA II/6, S. 165)という記述が列挙されている。しかし、この叙述から、ウォーラステインのように、世界貿易と世界市場によって資本主義的生産様式が成立したと結論づけることはできない(Wallerstein[1979]: p. 9)。じじつ、マルクスも現行版第3部第20章で次のように述べている。

「16世紀および17世紀においても、地理上の諸発見にともなって商業に生じた大きな諸革命——それとともに商人資本の発展——が、中世の封建的生産様式の近代資本主義的生産様式への移行を促進する主要な契機であったということは、疑う余地のないこと——そしてこの事実こそは、まったく誤った見解を生み出してきたのだが——である。……しかし、16世紀に(部分的にはなお17世紀にも)、商業の突然の拡張と新しい世界市場の創出とが、古い生産様式の没落と資本主義的生産様式の成立とに圧倒的な影響をおよぼしたとしても、このことは、逆にすでに創出された資本主義的生産様式の基礎上で生じ

たのである。」(MEGA II/4.2, S. 406)

ドップも認めていたことだが、世界市場における商品流通の発展が「移行」を促進する一要因であることは否定できない(Hilton et al.[1976]: p. 60)。ただし、マルクス自身がまさにこの事実から誤解が生まれると注意を促しているように、商業や商人資本の存在は、ただちに資本主義的生産様式の成立を意味するわけではない。なぜなら、「商業だけでなく商業資本もまた、資本主義的生産様式よりも古く、実際には資本の、歴史的にもっとも古い自由な存在様式である」(MEGA II/4.2, S. 396)からだ。前節で確認したように、この現行版第20章の叙述は、「理論的展開」ではなく、産業資本が「商業資本」を自己のもとに従属させる過程を歴史的に考察したものであって、商業が資本主義的生産様式の成立に影響を及ぼすのは、むしろ「すでに創出された資本主義的生産様式の基礎」上においてであることに注意しなければならない。なるほど、「商人資本の実存および一定程度の発展は、それ自体が資本主義的生産様式の発展にとっての歴史的前提である」。しかし、マルクスが強調するように、「商人資本の発展は、それだけでは、ある生産様式の他の生産様式への移行を……説明するには不十分なのだ」(ebenda, S. 398)。

さらにマルクスは、スウィージーらとは反対に、「商人資本の自立的な発展は、社会の一般的な経済的発展に反比例する」(ebenda, S. 401)ことを強調している。そもそも、前資本主義的生産様式に広く見られた、「高く売るために安く買う」という「商業の法則」は、「等価物どうしの交換」ではなく不等価交換にもとづくものであった(ebenda, S. 402)。それゆえ、全面的な商品生産すなわち等価交換にもとづく資本主義的生産様式が発展するにつれて、商人資本は、自立的な発展を阻害され、産業資本に従属せざるをえないのである。「ブルジョワ社会に先行する諸段階では商業が産業を支配するが、近代社会ではその逆である」(ebenda, S. 403)。もちろん、商業は、それがそのあいだで営まれる諸共同体や「主として使用価値の生産に向けられた」(MEGA II/3.5, S. 1550)古い生産様式を、価値という形態規定にしたがって多かれ少なかれ侵食する。しかし、注意しなければならないのは、「商業の分解作用は、生産する共同社会の性質におおいに依存している」(MEGA II/4.2, S. 403)という点である。

「商業がどの程度まで古い生産様式の分解を引き起こすかは、まずもって、この生産様式の堅固さと内部編成とに依存する。……また、この分解過程がどのような結果をもたらすか、すなわち古い生産様式

の代わりにどのような新しい生産様式が現れるかは、商業ではなく、古い生産様式そのものの性格に依存する。」(ebenda, S. 405)

したがって、西欧における「移行」のメルクマールは、商業の発展それ自体ではなく、次項で詳述するように、封建的生産様式の決定的特徴である「小経営的生産様式」^{❖6)}そのものの性格に依存している。しかも、この「移行過程」は、マルクスが第1部「本源の蓄積」章で強調しているように、とりわけイングランドにおいても14世紀から18世紀にかけて「長々と続く」ものであった(MEGA II/6, S. 683)。この点については第III節で詳しく検討しよう。

2 「資本主義以前」(現行版第3部第36章)における「歴史的考察」

さらに、封建的生産様式に対する解体作用とその限界に関しては、現行版第3部第36章でマルクスが述べているように、「商人資本」と並んで「その双生の兄弟」である「高利資本」に関する「歴史的考察」が重要である。商人資本と同様に、高利資本もまた「資本の大洪水以前の形態」に属しており、「資本主義的生産様式よりもずっと前からあって非常にさまざまな経済的社会構成体のなかに現れる資本形態に属する」(MEGA II/4.2, S. 646)。なぜなら、産業資本の発展にともなって資本主義的生産のもとに包摂された「利子生み資本」とは異なり、「高利資本の存在のためには、生産物の少なくとも一部分が商品に転化しており、商品取扱業と同時に貨幣がそのさまざまな機能において発展しているということ以外には何も必要でない」からだ(ebenda, S. 646)。したがって、「資本の生産様式のない資本の搾取」(ebenda, S. 650)という特徴からもわかるように、高利資本という形態において、「資本はその機能においてはそれが生産を支配する以前から存在することができる、そういう機能における資本でありさえすればよい」(MEGA II/3.1, S. 27)^{❖7)}。

以上をふまえたうえで、高利資本がもたらす封建的生産様式の解体作用とその限界について検討していきたい。資本主義的生産以前の高利資本の特徴的形態には、(1)「浪費をこととする貴人(おもに土地所有者)への貨幣貸し付けによる高利」と(2)「自分自身の労働条件をもっている小生産者への貨幣貸し付けによる高利」が存在する(MEGA II/4.2, S. 647)。マルクスが強調するように、両者とも「つまり高利による富裕な土地所有者の破滅も小生産者たちの搾取も、ともに貨幣資本の形成と集中とに通じる」(ebenda)。そして、こうした貨幣資

本の形成と集中は、前項で検討した商業と同様に、古い生産様式を破壊する作用をもっている。

「高利は、一方では封建的および古典古代的富および所有の破壊者として作用する。他方では、それは、小ブルジョワ的、小農の生産の、要するに生産者がまだ自分の生産手段の所有者として現れるようなすべての形態の破壊者として作用する」(ebenda, S. 649)。

しかし、マルクスもただちに留意しているように、こうした資本主義以前のあらゆる生産様式に対する高利の解体作用は、単に「所有諸形態を破壊し分解する」ことに限定される(ebenda)。というのも、貨幣および商品資本と同様に、流過程が生産過程を支配することなく形成された高利資本は、生産様式そのものを変化させることができないからだ。

「高利も商業も与えられた生産諸関係を搾取するのであり、それらをつくりだすのではなく、外からそれらに関わるのである。高利は、絶えず繰り返しその生産様式を搾取できるようにするためにそれを直接に維持しようとするのであり、保守的であり、ただそれをいっそう悲惨にするだけである。生産諸条件が商品として過程にはいり商品としてそれから出てくることが少なければ少ないほど、貨幣からそれらをつくりだすことはますます特別な行為として現われる。全生産が流通に立脚することが少なければ少ないほど、それだけ高利資本は栄えるのである。」(ebenda, S. 655)

ドップも的確に指摘しているように(Hilton et al.[1976]: p. 148), 前資本主義的生産様式において高利資本が古い生産様式を変化させることができないのは、「高利資本が、小生産の優勢に、すなわち自営農民などの優勢に対応している」(MEGA II/4.2, S. 647)からである。ここでは、小経営的生産すなわち「生産者による労働条件の所有(または占有)が——そしてそれに対応する個別化された生産——が内在的な規定」となっており、資本が「産業資本として労働に対立していない」ため、生産過程を包摂・支配することは決してない(ebenda, S. 648-649)。「生産様式そのもののなかで、資本はまだ、手工業的経営であろうと、小農であろうと、個々の労働者または労働者家族のもとに素材として従属している」(MEGA II/3.5, S. 1546)。ゆえに、高利は、資本主義的生産とは異なり、生産者と生産条件の絶対的分離によって労働の社会的生産力を発展させることはなく、むしろ既存の生産様式を維持し、生産力を「発展させないで麻痺させ、同時にこのような悲惨な状態を永久化する」(MEGA II/4.2, S. 649)。

3 | 前資本主義的生産の解体作用とは区別された、資本主義的生産の生成における高利資本の役割

前項で見たように、高利資本は、その破壊対象が「所有諸形態」に限定されるため、生産様式それ自体を変革することではなく、むしろ古い生産様式を固定化する。もっとも、高利資本は、「寄生虫」として絶えず既存の「生産関係を搾取する」ため、「生産者による自分の生産諸条件の所有が、同時に政治的諸関係の基礎」である「古典古代的諸関係」において、民衆の激しい憎悪や混乱を引き起こすという政治的意味を持っていた(ebenda)。しかしながら、ドップが看過し、スウィーギーも展開できなかった点ではあるが、マルクスは『61-63草稿』において、このような政治的意味とは異なった、より重要な歴史的意味を高利資本に付与している。それは、単に古い所有形態を破壊する解体作用ではなく、新しい生産様式の生成それ自体に高利資本が果たした役割にほかならない。

「この資本の作用が、政治的な——古代の状態等々を解体するというような——意味ではなく歴史的な意味を持つ限りでは、それは一方では、労働者から労働諸条件を分離することであり、また同じことを別の言葉で言えば、この分離によって、のちにこの生産諸条件を商品として買うことになる貨幣財産を形成することである。」(MEGA II/3.5, S. 1546)

ただし、マルクスは、この高利資本の「歴史的意味」についても、古い生産様式それ自体の内部編成と、そこからどのような生産様式が新たに生成するのかという点に注意を促している。というのも、高利によって形成された貨幣財産がどの程度まで古い生産様式を止揚し、そして西欧のように資本主義的生産様式をつくりだすかどうかは、「まったく、歴史的な発展段階に、またそれとともに与えられる諸事情にかかっている」(MEGA II/4.2, S. 647)からだ。じじつ、西欧における「封建制から資本主義への移行」とは異なる場合の、高利による新たな生産様式の生成に関して、マルクスは古代ローマの例を引き合いに出している。

「ローマの貴族がローマの平民——小農——をすっかり破滅させてしまったとき、搾取形態は終わりを告げたのであって、そのとき純粋な奴隷経済が小農経済にとって代わった。」^{❖8)}(ebenda, S. 648)

ケヴィン・B・アンダーソンが指摘しているように、マルクスは、最晩年の『『祖国雑記』編集部への手紙』(1877年)でも、古代ローマにおいては(1)小農は土地を失い、生産手段から分離され、(2)大土地所有が形成され、

(3)大貨幣資本も形成されていたことを強調している (Anderson[2010=2016]: p. ix)。しかし、ローマのプロレタリアは賃労働者へ転化することではなく、そこでは「資本主義的ではなく奴隷労働にもとづく生産様式が発展していった」(W 19, S. 112)。したがって、高利資本による、貨幣財産の形成と生産者からの生産手段の分離という「著しく類似した出来事でも、異なる歴史的環境のなかで生じるならば、全く異なる結果を導くのである」(ebenda)。じじつ、古代ローマとは異なり、西欧のように、「資本主義的生産様式のその他の諸条件が存在するところで、またそれが存在するときに、はじめて、高利は、新たな生産様式の形成手段の一つとして、封建領主や小生産の没落——資本としての労働諸条件の集中の手段[——として: 引用者]現われる」(MEGA II/4.2, S. 649-650)。ここの「その他の諸条件」とは、次節で詳述するように、主としてイングランドの農村における産業資本の生成を意味している。

前節で見たように、経済学批判における「歴史的考察」にとって問題となるのは、古代ローマにみられた、高利資本による古い生産様式の解体作用あるいは奴隷制的生産様式の成立ではなかった。あくまでもマルクスの主題は、高利資本が資本主義的生産の生成において果たす役割なのであって、その意味において、高利資本「それ自身が、資本の成立過程として歴史的に重要」で、かつ「土地所有に依存しない貨幣財産の形成」(ebenda, S. 650)であることは看過できない。というのも、マルクスは、資本主義的生産の生成に関する「歴史的考察」において、直接的生産者から生産諸条件を剥奪することで自らのもとに貨幣財産を形成する高利資本の役割を非常に重視しているからだ。

「高利が二つのことを実現するかぎり、すなわち、第一には一般に(商人身分と並んで)独立な貨幣財産を形成するということを実現し、第二には労働諸条件をわがものにすること、すなわち古い労働諸条件の占有者を滅ぼすということを実現するかぎり、高利は産業資本のための諸前提を形成するための強力な手段である。それは商人と全く同様である。」(ebenda, S. 656)

このように、西欧における封建的生産様式からの歴史的な「移行」において、「土地所有から独立した一階級のもとに蓄積された」(MEGA II/3.5, S. 1546)高利資本は、産業資本の前提を形成するための、「生産者からの生産諸条件の分離における強力な一能因」(ebenda, S. 1528)となる。それゆえ、ドップあるいはその立場を引き継い

だブレナーのように、「商業化モデル」批判を行うあまり、前資本主義的生産の解体作用とは区別された、高利資本による産業資本の形成過程を見落とすことはできない^{❖9)}。この「商業化モデル」批判の陥穽については後で詳しく見ることにしよう。

III

貨幣地代と農村における資本主義的借地農の生成

1 「資本主義的地代の生成」(現行版第3部第47章)における「歴史的考察」

ここまで『資本論』第3部草稿の「歴史的考察」として、「商人資本に関する歴史的なこと」(現行版第20章)および「資本主義以前」(現行版第36章)における、商人資本および高利資本を取り上げてきたが、本節では「資本主義的地代の生成」(現行版第47章)において展開された、貨幣地代すなわち金納化がもたらす封建的生産様式の解体作用とその限界について考察する。封建的土地所有における内部矛盾を重視したドップやヒルトンのみならず、同時期のソビエト史学において展開された「移行論争」においても、イングランド農業史との関連で、コスミンスキーやラヴロフスキーなど多くの論者が第1部第24章と並んで第3部第47章に言及している(山岡・福富編[1963], ラヴロフスキー[1972])。また、新「移行論争」においても、「ドップ=スウィージー論争」の止揚を目的としたブレナーが、「産業資本家の生成」に関して、両者が異なる視座(小生産者と問屋制度)から着目した羊毛「工業」ではなく、農村における借地農 Pächter を重視している(Brenner[2007]: p. 86)。このように、「本源的蓄積」論の主題でもある「産業資本家の生成」と「資本主義的借地農の生成」は、「資本主義的地代の生成」(現行版第3部第47章)と密接に関わるので、本節では第1部第24章の「歴史的考察」も射程に入れて議論をすすめたい。

マルクスは、現行版第6篇第47章以前に第37~46章において、近代的な意味での地代、すなわち資本主義的地代を、「平均利潤を越える超過分としての地代」(MEGA II/4.2, S. 725)として理論的に考察し終えていた。この「理論的展開」の前提としては、「農業が製造業とまったく同様に資本主義的生産様式によって支配され」(ebenda, S. 667), 「農村労働者たちから土地が収奪され、農業を利潤のために経営する資本家のもとに農村労働者たちが従属させ」られている(ebenda, S. 668)。さらに、土地所有についても、資本主義的生産の成立にとも

なって、「一方では、支配・隷属関係からすっかり解放され、他方では、労働条件としての土地が土地所有および土地所有者から完全に分離され」ている(ebenda, S. 670)。ところが、第I節で見たように、現行版第6篇を締め括る第47章の「歴史的考察」においては、以上の前提とは反対に、資本主義的生産は未だ農業を完全には占領しておらず、人格的依存関係も残存していることが想定され、いかにして歴史的に生成しつつある生産的資本が、眼前の「前近代的土地所有あるいは地代」を包摂し、自己のもとに従属させるかが叙述される。

周知のように、現行版第47章における地代諸形態の「歴史的考察」においては、労働地代や生産物地代と比べて、貨幣地代が資本主義的地代に最も論理的に近い地代形態として位置づけられている。なぜなら、地代の貨幣地代としての発展は、「商品生産の、より厳密に言えば資本主義的生産の基礎上的のみ」(ebenda, S. 689)可能なのであって、貨幣地代は、農業生産物が商品となるのと同じ程度で発展するからである。じじつ、「生産物地代から貨幣地代への転化は、商業、都市工業、商品生産一般が、それゆえ貨幣流通がすでに著しく発展していることを前提とする」(ebenda, S. 738)ため、貨幣地代は、それ以前の諸形態とは決定的に異なり、価値という形態規定に浸食されている。もちろん、その結果として「生産様式全体が市場関係に依存するようになる」とはいえ、「直接的生産者は……その生活手段の最大部分を相変わず自ら生産し続ける」ため、生産様式の性格はただ多少とも変化するにすぎない(ebenda, S. 737)。前節で見た商人資本や高利資本と同様に、貨幣流通の進展だけでは、古い生産様式それ自体の変化は生じ得ないのである。じじつ、ブレナーがポスタンを批判して述べているように、12世紀のイングランドで金納化が広く普及した後も、封建領主の農民に対する権力は依然として存続し、金納化が領主の意志によって一方的に命じられたのだ(Brenner[1985a]: p. 26)。

さらに、マルクスの記述にしたがって、より詳しく考察するならば、貨幣地代は、「生産諸条件の所有者に支払わなければならない不払剰余労働の正常な形態としての地代の、最後の形態であると同時にその解消形態」であった(MEGA II/4.2, S. 738)。つまり、前近代的な地代の最終形態としては、すなわち貨幣地代が「生産物地代の単に転化した純粋な形態」である限りにおいては、人格的依存関係がなお残存しており、「地代支払者はいつでも、土地の現実の利用者かつ占有者」となっている(ebenda, S. 743)。しかし他方で、前近代的な地代の

解消形態としては、貨幣地代は、さらに発展すると、土地所有を「自由な農民所有」すなわち過渡的形態としての「分割地所有」に転化させるか、または「資本主義的生産様式の形態に、資本主義的農場経営者 farmer の支払う地代に、導かざるをえない」(ebenda, S. 739)。

「この転化は、一方では、他の点で適切な一般的生産諸関係がある場合には、旧来の占有者をしだいに収奪して、資本主義的農場経営者に取り替えるのに利用される。他方では、この転化は、旧来の占有者が自分の地代支払義務を償却金で買い取って、自分の耕作地の完全な所有権をもつ独立農民に転化するという結果をもたらす。現物地代の貨幣地代への転化は、さらに、無産の、そして貨幣で雇われる、日雇い労働者という一階級の形成を必然的にともなうだけでなく、それに先行されさえもする。」(ebenda, S. 739)

こうして、隷属農民と土地所有者とのあいだの人格的支配・隷属関係にもとづく伝統的關係が、貨幣地代の発展にともなって、契約による「純粋な貨幣関係」に転化することで、隷属農民すなわち土地占有者の「独立自営農民」への転化が生じるのみならず、前近代的土地所有のもとでの「小経営的生産様式」が漸次的に没落し、「みづから生産する土地占有者たち自身のあいだに、資本主義的農場経営者たちの培養所が生じる」のである(ebenda)。さらに、マルクスによれば、こうした土地占有者の借地農への転化は、「他の点で適切な一般的生産諸関係がある場合に」生じ、「農村外部での資本主義的生産の一般的発展によって条件付けられて」いるという(ebenda)。すなわち、貨幣地代の発展と並行して、「都市ですでに発展していた資本主義的経営様式……を農村に移す資本家」に対する土地の賃貸しが登場し(ebenda, S. 740)、「土地の譲渡可能性と譲渡そのものが本質的契機になっている」(ebenda, S. 742)場合である。じじつ、この場合に、都市の貨幣所有者などは「土地を買って、それを農民なり資本家なりに賃貸しし、彼らがこうして投下した資本の利子の形態として地代を享受している」(ebenda, S. 742-743)。それゆえ、都市資本家の発展をともなった貨幣地代の発展は、資本主義的借地農の生成にとって主要な契機である。

「この形態は封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行にさいして世界市場を支配している国々においてだけ、一般的になりうる。地主と現実には耕作する農民とのあいだに資本主義的農場経営者が介在するようになれば、古い農村的生産様式から生じたすべての関係は引き裂かれる。借地農は、こ

れら耕作者の現実の指揮者となり、彼らの剰余労働の現実の搾取者となるのであって、他方、地主は、ただこの資本主義的農場経営者にたいしてのみ直接関係をもち、しかも単なる貨幣・契約関係をもつのである。」(ebenda, S. 740)

ここでは貨幣地代の進展と土地商品化による都市資本家の農村への進出が、いかにして「以前の搾取様式つまり所有者と現実の耕作者との関係の変化を、そしてまた地代そのものの変化を促進する」(ebenda, S. 743)かが述べられている。したがって、ドップやブレナーとは異なり、スウィージーのような単純なモデルではないにせよ、「移行」における貨幣地代や都市資本家の役割を過小評価することはできない。しかし他方で、いわゆる「商業化モデル」のように、産業資本の生成を、都市における同職組合親方や独立商工業者たちの小資本家への転化に収斂させることもできない。マルクスが第1部「本源的蓄積」章で注記しているように、「農業」に対応する意味としての「工業」資本家の生成は、数世紀に渡る借地農の生成よりも急速に進行するが、「「カテゴリー的」な意味では、借地農も工場主と全く同様に産業資本家である」(MEGA II/7, S. 667)。それゆえ、「本源的蓄積」章の主題である「資本主義的借地農の生成」および「産業資本家の生成」は、「政治的マルクス主義」のブレナーやウッドが強調しているように、イングランドの農村における産業資本の生成として把握されなければならない^{❖10}。

2 | 農業における「資本のもとへの形態的包摂」から「資本のもとへの実質的包摂」への移行

マルクスは、現行版第3部第47章においても、ここでの主題ではないと断ったうえで、貨幣地代から資本主義的地代への転化に照応した、生産様式の「漸次的転化」について展開している。さしあたり、農村労働の「資本のもとへの形態的包摂」において、資本主義的借地農は、自らの生活維持手段を越える超過分だけではなく、土地生産物全体を商品として生産せざるをえない。「いまでは農業労働さえも、自己および自己の生産性に直接に包摂したのは、もはや土地ではなく、資本である」(MEGA II/4.2, S. 741)。また、第1部「本源的蓄積」章で詳述されたように、「自立的で指導的な力としての資本の農耕への参加」は、都市工業のように急速ではなく、漸次的な過程であると同時に、本来の農耕とは異なる「牧畜とくに牧羊」といった特殊な生産部門において展開される(ebenda, S. 742)。そして、「この生産様

式が、資本のもとへの農業の単なる形態的包摂からある程度脱し、農業においてこの生産様式に必要な改良と生産費引き下げが生じる」^{❖11} (ebenda)。これこそが、イングランドにおいて「15世紀の最後の三分の一期」にはじまり、「16世紀のほとんど全体を通じて続いた」、いわゆる「農業革命」にほかならない(MEGA II/6, S. 668)。

「独立自営農民の稀薄化には、……ただ工業プロレタリアートの濃密化が対応していただけない。その耕作者の数が減少したにもかかわらず、土地は以前と同量かまたはより多量の生産物を生みだした。というのは、土地所有関係の革命が耕作方法の改良や協業の大規模化、生産手段の集積などを伴っていたからであり、また、農村賃労働者の労働の強度が高められただけではなく、彼らが自分自身のために労働した生産場面がますます縮小したからである」(ebenda, S. 669-670)。

この「農業革命」は、農民を貧窮化させると同時に、借地農を富裕化させた。「借地農は、共同牧場などの横領によって、急速にしかもほとんどただで自分の家畜をふやすことができ、……さらにはこの家畜を土地にいつそう豊富な肥料を供給するために用いる」(MEGA II/7, S. 660-661)。他方、土地の収奪と追放による小農らの遊離は、彼らの賃労働者への転化の結果、「彼らの生活手段および労働手段を資本の物的要素に転化させる」(ebenda, S. 664)。このようにして、以前は農村家内工業によって生み出されていた生活手段や原料が、資本主義的借地農によって商品として生産されるようになったことで、資本主義的生産の発展を可能とする一国の「国内市场」が成立するのである。ブレナーが述べているように、イングランドの農業資本主義は、農業改良によって多くの人口が工業部門に参入することを促進したばかりか、イングランドの工業発展の本質的な構成要素であった国内市場の成長を可能にしたのだ(Brenner [1985a]: p. 53)。さらに、「ブレナー論争」ではほとんど着目されなかったが、農業における「資本のもとへの実質的包摂」において決定的なのは、農村家内工業を最終的に解体する大工業の役割である。

「大工業がはじめて機械設備によって資本主義的農業の恒常的な基礎を与え、巨大な数の農民を徹底的に収奪し、家内的・農村的工業——紡績と織物——の根を引き抜いてそれと農耕との分離を完成するのである。それゆえまた、大工業がはじめて産業資本のために国内市場の全体を征服するのである。」(MEGA II/6, S. 672)

したがって、第1部第13章「機械設備と大工業」第10節「大工業と農業」にもみられるように、大工業における「資本のもとへの実質的包摂」を単に「都市工業」に限定することはできない。なるほど、貨幣地代の進展と土地商品化による都市資本家の農村への進出は、封建的土地所有や小経営的生産様式の解体にとって大きな役割を果たしたが、資本主義的生産様式への「移行」においては、都市ではなく農村における産業資本の成立が決定的に重要である。これは、「本源的蓄積」過程において漸次的に進行するものであって、「生産者と生産手段の分離」を前提として、借地農たちは、剰余価値を獲得するために土地生産物を商品として生産せざるをえない。そして、こうした農業における「資本のもとへの形態的包摂」がさらに展開し、生産過程の技術的条件(耕作方法)と土地所有関係に「農業革命」を引き起こすやいなや、「大工業」による「国内市場」の成立をつうじて、農業における「資本のもとへの実質的包摂」が完成されるのだ^{❖12)}。ここで最後に節を変えて、「商業化モデル」による都市工業の発展ではなく、イングランドにおける資本主義的農業の成立として資本主義の起源を把握する、「政治的マルクス主義」の移行理論を検討していきたい。

IV

「政治的マルクス主義」の移行理論 ——「農業資本主義」論再考

第II節で未検討ではあったが、現行版第3部第20章の結論部分には「移行論争」において大きな論点となった、「移行」の「真に革命的な道」に関する次の記述が存在する。

「封建的生産様式からの移行は、二重の仕方で行われる。生産者が商人および資本家になって、中世的都市工業のツンフトに拘束された資本と農業的現物経済とに対立する。これが真に革命的な道である。他方で、商人が生産を直接にわがものとする。あとのほうの道が、どれほど歴史的に移行として作用しようとも、……この道は、それ自体としては、古い生産様式を変革するまでには至らず、むしろ古い生産様式を保存し、それを自己の前提として保持する。」(MEGA II/4.2, S. 408)

すでに見たように、「移行」における「商人資本」の役割を強調するスウィーギーは、前者の「小商品生産者が資本家に転化したときに資本主義が発生する」道に反

対し、後者の「商人が問屋制度の迂回的経路をとって産業資本家になる」道が現実的であると主張した(Hilton et al.[1976]: p. 54)。もちろん、マルクスにとって後者の道は、「まさしくこの[商人資本の]形態から、近代的資本関係がその一部は発展したのであって、あちらこちらで常に本来の資本関係への移行をなしている」(MEGA II/4.1, S. 94-95)。しかし、第II節でみたように「ここで資本のもとへの形態的包摂ははまだ生じておらず」(ebenda, S. 94)、むしろ既存の生産様式を固定化し続けるのである。高橋も、スウィーギーを反批判しつつ、両者の道の「対立と闘争」が重要であるとして、「前期的」商業資本が産業資本に従属する「革命的」プロセスを強調する^{❖13)}(高橋[1968]: 252頁)。

しかし、ウッドが述べているように、スウィーギーのマルクス批判は単なる実証的な反論ではなく、重要な論点を提起している(Wood[2002]: p. 42)。なぜなら、高橋やドップが定式化した、「独立自営農民から出現した資本家的農業家」という「真に革命的な道」だけでは、小商品生産と資本主義とのあいだの質的な差異を説明できないからである。なるほど、高橋やドップは、古い生産様式に対する商人資本の解体作用を限定的に捉え、封建的生産様式の解体をその内部矛盾から把握している。ところが、産業資本の成立に関しては、小商品生産者がいったん封建的な阻害要因から解放されるやいなや、生産力の発展にともなっていえば自動的に資本家へと成長するとされる。すなわち、ウッドによれば、ドップもまた「商業化モデル」に陥っていると言わざるをえないのだ(ibid.)。さらにブレナーも、ドップの議論が、封建制内部のダイナミズムを強調するものの、封建的生産様式の解体と資本主義の成立を区別せず、一方から他方が自動的に展開する論理を内包している、と批判する(Brenner[1978]: p. 134)。そして、ブレナー自身が追求するのは、ドップやヒルトンとは異なり、すでに存在している資本主義の論理を前提にすることのない内的ダイナミズムである。この点に関して、ウッドがブレナーの議論を次のように簡潔に要約している。

「しかしブレナーの場合、それは資本主義に向かう内的衝動の解放という問題ではない。そうではなくて、領主と農民とがイングランド特有のある特殊の条件下において互いに階級的衝突を繰り返し、自己を現状のまま再生産しているうちに、資本主義のダイナミズムを知らず知らずのうちに発動させたのだということである。その意図せざる結果として、生産者が市場の命法に従属するという状況が生まれたのであ

る。](Wood[2002]: p. 52)

「政治的マルクス主義」の移行理論にとって問題なのは、西欧封建制の内部矛盾一般ではなく、イングランドに特殊な、領主と農民の所有形態および階級関係にほかならない。じじつ、イングランドの資本主義的借地農は、資本家へと成長する単なる小生産者ではなく、第1部「本源的蓄積」章で述べられているように、彼を資本家に転化させたのは「生産手段に対する特殊な関係、つまり土地そのものを使用する条件」であった(Wood[2002]: p. 54)。しかし、ウッドの「市場の命法」というタームは不明瞭であり、「商業化モデル」とは異なる視角を強調したいのであれば、前節で見たように、農村労働の「資本のもとへの形態的および実質的包摂」をマルクスの理論的アプローチにもとづいて展開すべきである^{❖14)}。じじつ、ブレナーやウッドが重視する農業資本主義における「改良」(土地生産性の向上、農業技術や農耕方法の革新)は、彼らが言うような、新たな資本主義的な所有概念を単に意味するのではなく、むしろ農業の生産過程において剰余価値生産が追求された結果、土地を含む生産手段の技術的諸条件が根本的に変革される事態を意味している。この意味において、ブレナーのように、「搾取者相互や直接的生産者相互の水平的な関係」を含めた社会的な闘争主体の「偶発性」を強調しすぎるあまり、「生産関係」を「社会的所有関係」に置き換えてしまうと^{❖15)}、「移行」において最も決定的な、生産様式における実質的变化を捉えることはできない。

さらに、彼らの「商業化モデル」批判は、商業や市場をスミスの単なる「外的力」として、すなわち「移行」という「説明すべき事柄を自明のものとする」論点先取として拒絶するが、結局のところ、第II・III節で見たように、商人資本および高利資本による貨幣財産の形成や貨幣地代の発展が、産業資本の形成にとって果たす役割を看過してしまうのである。もちろん、マルクスにとっても、農村における産業資本の形成が「移行」のメルクマールとなっている。しかし、マルクスの理論的アプローチによれば、生産者の生産手段からの分離という生産関係の根本的变化は、貨幣財産の形成と表裏一体なのである。さらに、農業における「資本のもとへの実質的包摂」を把握するうえでも、貨幣地代の発展や土地の商品化による「資本のもとへの形態的包摂」の拡大が、都市工業や大工業の発展を媒介として、土地や生産手段の改良に対して決定的な影響を及ぼす点は見逃すことができない。このように、『資本論』第3部草稿の再

検討をつうじて、決して「商業化モデル」に陥ることなく、ブレナーやウッドの「農業資本主義」論に欠けていた論点、すなわち商品や貨幣といった経済的形態規定によって引き起こされた、生産関係の実質的变化を捉えることができよう。

おわりに

以上、新旧「移行論争」を題材にして、マルクス『資本論』第3部草稿における3つの「歴史的考察」を「理論的展開」との区別をふまえて検討してきた。新「移行論争」から明らかなように、『資本論』における「資本主義の起源」は農村における産業資本の成立であるが、諸草稿を慎重に検討することで、旧「移行論争」において焦点化されていた、商人資本および高利資本が「移行」において果たす意義と限界をより明確に把握することできるようになったといえる。また、「政治的マルクス主義」の移行理論は、主流派および伝統的マルクス主義の「商業化モデル」を批判するあまり、「生産関係」概念を事実上否認してしまうため、生産者の生産手段からの分離という生産関係の根本的变化が、都市工業や世界市場による貨幣財産の形成と密接不可分であることを把握できない。しかし、マルクスの物象化論的視座からすると、商品や貨幣といった経済的形態規定は、単に「市場」や「流通過程」をさすのではなく、「資本のもとへの実質的包摂」において生産過程を貫徹するのである(佐々木[2011]:360頁)。その意味において、本稿は、農村における生産関係の実質的な変化を貨幣地代の発展や土地の商品化と結びつけることで、「商業化モデル」と「政治的マルクス主義」を総合し、「農業資本主義」論をより理論的に位置づけることができたといえよう。

ところで、新旧「移行論争」においては、本稿で検討した理論的アプローチのみならず、多くの歴史学者や社会学者を巻き込んで実証的な議論が活発に交わされ、その成果の一部は現在においても参照されつづけている。もちろん、マルクスの『資本論』関連草稿における「歴史的考察」に関しても、本稿の理論的アプローチとは異なる実証的な観点からすると、疑問の余地があるかもしれない。とはいえ、諸草稿にもとづく考証学的研究や、本稿では検討することのできなかったMEGA第IV部門第27巻収録予定の「民族学ノート」における諸研究(歴史学・文化人類学・家族制度史など)は、実証

的研究に対してもより豊かで幅広いパースペクティブを提供してくれるだろう。現代においても、ホブズボームが西欧以外を想定して述べているように、資本主義への移行は「決して画一的ではない過程」であったが

(Hilton et al.[1976]: p. 162), 晩期マルクスは、狭義の「移行」を考察するのみならず、資本主義以前の生産様式および共同体の固有性や多様性にますます着目していったように思われる。今後の研究課題としたい。

注

- ❖1) サセックス大学を中心とする「政治的マルクス主義」は、構造主義と目的論的歴史観を批判し、社会的行為主体としての階級概念によって、伝統的マルクス主義の再歴史化・再政治化を目指すプロジェクトとされる。ブレナーは「社会的所有関係」を用いる理由を次のように述べている。「第一の理由は、生産が行われる社会的構造の枠組は、生産そのもの、すなわち労働過程における協業や組織化の形態によって何らかの方法で規定されるという考えを伝えるために、社会的生産関係という語が用いられる場合があるからである。私にとってこれはどうしようもないほどミスリーディングである。第二は、垂直的な階級がどのようにして構造化あるいは制約されるのか、すなわち剰余の搾出、搾取者と直接的生産者との関係——社会的生産諸関係が一般的に意味するもの——を暴露するだけが必要なことではないと考えるからである。どちらかと言えば、搾取者相互や直接的生産者相互の水平的な関係がどのようにして構造化あるいは制約されるのかを解明することがより重要でずらある」(Brenner[2007]: p. 58)。なお、ブレナー論文については邦訳『所有と進歩』を参照したが、適宜訳文を変更した。このように階級的闘争関係を重視し、「生産関係」概念を修正するブレナーの問題点については、第IV節で取り上げる。
- ❖2) ブレナー論争のサーベイについては、武[1983, 1984]を参照。
- ❖3) 久留間[1969]の先駆的研究を除いて、この点は先行研究でほとんど指摘されてはいるが、中村哲[2001]も、「資本主義的生産関係」の「現状分析」とは区別された「歴史分析」を把握している。しかし、中村は「理論的展開」(現状分析)と「歴史的考察」(歴史分析)の区別を理解するにとどまっており、両者の関係をつかんでいない。
- ❖4) じつは、マルクスは「要綱」執筆当時の手紙において、「資本一般」のなかに含まれるべき「歴史的考察」としての「本源的蓄積」に関する叙述とは別に、「独立した仕事」として「経済的な諸カテゴリーと諸関係の発展の簡単な歴史的素描」(W 29, S. 551)を著作として執筆する予定であると述べていた。
- ❖5) なお、草稿においては、現行版第36章に使われた部分は「6」前ブルジョワ的諸関係 *Vorbürgerliches* と題されているものの、第20章の該当箇所では節番号のみで見出しはなく、第47章の該当箇所には、前後との区切りさえも存在しない。しかし、大谷も述べているように、エンゲルスの編集は適切にも「理論的展開」と「歴史的考察」の区別がわかるように、これらの部分を独立の章として各篇の末尾においたのである(大谷[2016]: 384頁)。ただし、それらは実証的な「歴史的事実」(清水[2013]: 41頁)ではなく、経済学批判の構成要素であることに注意されたい。
- ❖6) 大谷も指摘しているように、マルクスは「本源的蓄積」論において、「移行」を「農奴制から資本主義的生産への直接的転化」として論じるだけでなく、「資本主義的生産様式の生成をもっぱら小経営的生産様式からの転化」として把握している(大谷[2011]: 151頁)。「移行論争」においても、ドップやヒルトンが的確にこの点を強調していた(Hilton et al.[1976]: p. 58, 165)。
- ❖7) MEGA II/4.2 付属資料の注解にもあるように、マルクスは、「6」前ブルジョワ的諸関係の執筆にあたり、『61-63草稿』における「利子生み資本」に関する叙述を大幅に利用しているため、合わせて検討する。
- ❖8) 中村が指摘しているように、「小農経済」すなわち小経営的生産様式は、あらゆる「奴隷制や農奴制やその他の隷属状態」において存在するが、ここでの「純粋な奴隷経済」すなわち「本来の奴隷経営(家父長制的奴隷制と奴隷制大経営)」においては例外であることに注意されたい(中村[1977]: 270頁)。
- ❖9) マルクスは、すでに「要綱」『資本主義的生産に先行する諸形態』においても、商業が大規模に発展した古代ローマのように「単に貨幣財産が定在している」だけでは近代資本主義が成立することはないと注意を促しながらも、生産者から生産条件が分離することで形成された貨幣財産が、西欧における産業資本の成立にとって重要であったと述べている(MEGA II/1.2, S. 408)。したがって、『資本論』「本源的蓄積」論に対して「諸形態」は未だ都市や商業の発展を「移行」の主要因とする傾向が強く、「商業化モデル」から完全に抜け出していないというウッドの批判はミスリーディングである(Wood[2008]: p. 87)。
- ❖10) 世界システム論による「農業資本主義」論批判としては、Mielants[2007]を参照。ただし、ミランの議論は「商業化モデル」の焼き直しであり、中世の都市国家間システムを重視することで、資本主義の農村的起源を実証主義的に批判しているにすぎない。なお、宇野もまた、段階論からドップの議論をイギリスに典型的な産業資本段階として、スウィージーの議論を世界市場における重商主義段階として整理するが、「資本主義の農村的起源」を把握していない。宇野派による「農業資本主義」論の限定的受容については、櫻井[2009]を参照。
- ❖11) MEGA 版の草稿とは異なり、現行版では「形態的」という語が削除されてしまっているが、ここでマルクスは明確に、農業における形態的包摂から実質的包摂への移行を想定している。
- ❖12) ここで注意されたいのは、形態的包摂から実質的包摂への移行は、あくまで資本主義的生産様式そのものの基礎上で進行するのだが、マルクスが『61-63草稿』で述べているように、この「理論的展開」が、「歴史的考察」すなわち「当面の主題[本源的蓄積]にとっても相変わらず重要である」という点である(MEGA II/3.6, S. 2375)。「……われわれは、この項[本源的蓄積]で資本主義的生産様式そのものの基礎上で進行するこれらの変化を、常に顧慮することができる」(ebenda)。したがって、本稿の主題である生産様式の歴史的「移行」、すなわち「資本主義の農村的起源」においても、農業における形態的包摂から実質的包摂への移行という「理論的展開」が考慮されるべきである。
- ❖13) なお、ブレナーは、論争後に大作『商人と革命——1550-1653

年における商業的变化, 政治闘争およびロンドンの海外貿易商人たち」(Brenner[2003])において, 出自では生産的プランテーションに従事する点で「第一の道」をたどりながらも, 貿易商人としては「第二の道」をたどる「新興貿易商人」を論証している(大西[1999]: 140頁)。

- ❖14) じじつ, マルクスは「直接的生産過程の諸結果」における「資本のもとへの労働の実質的包摂」と題された箇所、アーサー・ヤングの『政治算術』から次の文章を引用している。「生存のための農業は……商業のための農業に変わった。……国土の改良は……こうした変化に対応するものであった」(MEGA II/4.1, S. 105)。なお, ウッドと同じ「政治的マルクス主義」に属しながら,

農業と工業における「資本のもとへの形態的および実質的包摂」の視角から, 「産業革命」の起源を「農業資本主義」論から再検討した近年の労作として, Žmolek[2013]を参照。

- ❖15) 「イングランドにおいて急激な農民層分解を引き起こし, ヨーマン(ほとんどの場合, 大規模な商業的借地農 tenant)の勃興をもたらした原因は, ……市場の勃興そのものではなく, むしろイングランドの農業生産者を競争的な生産に完全に依存させることになった社会的所有関係だった」(Brenner[1985b]: p. 301)。このようにブレナーは, 「生産関係」概念を放棄するため, 市場との関連において, 農業における「資本のもとへの実質的包摂」すなわち生産関係の実質的变化を定式化できない。

参考文献

マルクスからの引用には以下の略称を用いた。

- W: Karl Marx/Friedrich Engels, *Werke*. Bd. 1-43. Ergänzungsband. Teil. 1-2. Berlin 1956-1990.
- MEGA: Karl Marx/Friedrich Engels, *Gesamtausgabe*. Berlin 1975ff.
- 宇野弘藏[1966]『社会科学の根本問題』青木書店
- 大谷禎之介[2011]『マルクスのアソシエーション論』桜井書店
——[2016]『マルクスの利子生み資本論』第4巻, 桜井書店
- 大西晴樹[1999]『イギリス市民革命論再考: ロバート・ブレナーの所論をめぐって』『商経論叢』第35巻第2号, 神奈川大学
- 久留間鮫造編[1969]『マルクス経済学レキシコン』2, 大月書店
- 櫻井毅[2009]『資本主義の農業的起源と経済学』社会評論社
- 佐々木隆治[2011]『マルクスの物象化論』社会評論社
- 清水真志[2013]「もう一つの商業資本論(1)——商人資本に関する歴史的事実」を手がかりとして『専修経済学論集』第48巻第2号, 専修大学
- 高橋幸一郎[1968]『市民革命の構造 増補版』御茶の水書房
- 武暢夫[1983, 1984]「工業化前のヨーロッパにおける農業の階級構造と経済発展: 若干の論争問題(1)~(3)」『富大経済論集』第28巻第3号・第29巻第1号・第30巻第1号, 富山大学
- 中村哲[1977]『奴隷制・農奴制の理論』東京大学出版会
——[2001]「マルクスの歴史分析の方法」『『経済学批判要綱』における歴史と論理』青木書店
- 松原智雄[1982]「『封建制から資本主義への移行』に関する方法的諸問題(その1・2)」『苦小牧工業専門学校紀要』第18・19号
- 山岡亮一・福富正実編[1963]『資本主義への移行論争』三一書房
- ラヴロフスキー・B・M[1972]『近代イギリス土地制度史と地代論』福富正実訳, 未来社
- Anderson, K. B. [2010=2016] *Marx at the margins: on nationalism, ethnicity, and non-Western societies*, The University of Chicago Press. (平子友長監訳『周縁のマルクス』社会評論社, 2015年)
- Brenner, R. [1978] “Dobb on the Transition from Feudalism to Capitalism”, *Cambridge Journal of Economics*, 2(2), pp. 121-140.
——[1985a] “Agrarian Class Structure and Economic Development in Pre-Industrial Europe”: *The Brenner Debate*, Edited by Aston, T. H. and Philpin, C. H. E., Cambridge University Press. (「産業化以前のヨーロッパにおける農村の階級構造と経済発展」長原豊監訳『所有と進歩

——ブレナー論争』日本経済評論社, 2013年, 所収)

- [1985b] “The Agrarian Roots of European Capitalism”: *The Brenner Debate*, Edited by Aston, T. H. and Philpin, C. H. E., Cambridge University Press. (「ヨーロッパ資本主義の農村の起源」同上)
- [2003] *Merchants and Revolution*, Commercial Change.
- [2007] “Property and Progress: Where Adam Smith Went Wrong”: *Marxist History-Writing for the Twenty-first Century*, Edited by Wickham, C., Oxford University Press. (「所有と進歩」同上)
- Dobb, M. [1946] *Studies in the Development of Capitalism*, Routledge. (京大近代史研究会訳『資本主義発展の研究 I・II』岩波書店, 1954・55年)
- Frank, A. G. [1978] *Dependent Accumulation and Underdevelopment*, Macmillan. (吾郷健二訳『従属的蓄積と低開発』岩波書店, 1980年)
- Hilton, R., Dobb, M., Sweezy, P., Takahashi, K., and et al. [1976] *The Transition from Feudalism to Capitalism*, New Left Books. (大阪経済法科大学経済研究所訳『封建制から資本主義への移行』拓殖書房, 1982年)
- Laclau, E. [1971] “Feudalism and Capitalism in Latin America”, *New Left Review*, 1/67, pp. 19-38. (原田金一郎訳『ラテンアメリカにおける封建制と資本主義』横越英一監訳『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』拓殖書房, 1985年, 所収)
- Mielants, E. H. [2007] *The Origins of Capitalism and the “Rise of the West”*, Temple University Press. (山下範久訳『資本主義の起源と「西洋」の勃興』藤原書店, 2011年)
- Wallerstein, I. [1979] *The Capitalist World-Economy*, Cambridge University Press. (藤瀬浩司・麻沼賢彦・金井雄一訳『資本主義世界経済 I』名古屋大学出版会, 1987年)
- Wood, E. M. [2002] *The Origin of Capitalism*, Verso. (平子友長・中村好孝訳『資本主義の起源』こぶし書房, 2001年)
——[2008] “Historical materialism in ‘Forms which Precede Capitalist Production’”: *Karl Marx Grundrisse: Foundations of the Critique of Political Economy*, Edited by Marcello Musto, Routledge.
- Žmolek, M. A. [2013] *Rethinking the Industrial Revolution: Five Centuries of Transition from Agrarian to Industrial Capitalism in England*, Brill.

(2015年12月13日受理 2016年6月11日採択)